

BPSD を有した認知症患者に対する無誤学習の効果

Effect of errorless learning for dementia patients who have BPSD

○川村立・森下浩充・是村由佳

(社会医療法人仁生会細木病院)(医療法人五月会須崎くろしお病院)(慶應義塾大学先端研究センター)

Ryu Kawamura, Hiromichi Morishita, Yuka Koremura

(Hosogi Hospital) (Susaki Kuroshio Hospital) (Keio University)

keywords: BPSD、視覚的プロンプト、無誤学習

I. 問題と目的

Behavioral Psychological Symptoms of Dementia (BPSD)とは、認知症患者にしばしば出現する知覚や思考内容、気分、行動の障害であり、認知症の約80%がBPSDを有しているといわれている。また、BPSDは、認知症の中核障害である認知機能障害以上に患者のQOLを低下させ、介護者の負担も増大させることが知られている。第一筆者の維持期病棟においても、BPSDによる自傷行為や拒絶、妄想、言語的攻撃行動、意欲の低下などを認めたアルツハイマー型認知症患者が入院しており、関わり方に難渋した。病棟生活内では特に、他者との関わりや、身体接触時にBPSD行動が出現していた。

そこで、本研究では、従来のST訓練に加え、対象者のBPSD行動に対して(1)先行刺激の調整、(2)課題の難易度調整、(3)強化刺激の変更を行った無誤学習による介入を行い、その効果について検討した。

II. 方法

対象者: アルツハイマー型認知症と診断された80代女性1名。医学的診断名は脳梗塞後遺症。神経放射線学的所見はMRI T2強調画像で両側被殻、両側視床に多発性脳梗塞を認めた。言語病理学診断名は、言語障害であり、第1セッションより円滑な意思疎通は困難であった。認知機能検査のMMSのスコアは4/30であった。BPSDとして、額を叩く自傷行為、拒絶、妄想、言語的攻撃行動、状況にそぐわない発言や易怒性がみられた。自傷行為などを行っていた時に口頭での注意を行っていたが、減少しなかった。

従属変数: BPSDのうち、訓練中(課題従事中)に額を叩いた回数を従属変数とした。

独立変数: (1)先行刺激の調整、(2)課題の難易度調整、(3)後続刺激の調整を一つのパッケージとして行い、無誤学習を用いたST訓練を行った。

実験デザイン: ABABデザインであった。

手続き: ベースライン期(A1, A2)では、従来のST訓練として、入室から退室まで、全て口頭により指示をした。また、課題は、読み書き・計算で、筆記による回答で行った。

介入期(B1, B2)では、以下の3点に関するパッケージで行った。(1)先行刺激の調整: iPadを用い、視覚的プロンプトによる入室、訓練誘導、退室の見通しを提示。文字・写真・動画で、挨拶や訓練室、移乗方法、課題後の退室を提示。(2)課題の難易度調整: 課題従事中は、無誤学習となるよう、読み書き課題でのプロンプトやフィードバック、計算課題で、必ず正答できる課題(例: 1+1=)から開始し、その後も正答可能な課題の実施。計算課題では口頭による解答。(3)後続刺激の調整: 正答時の口頭での賞賛や拍手、笑顔などの即時強化刺激の提示。次の先行刺激を提示するまで(課題間)の子供の人形を手に取りあそぶ。

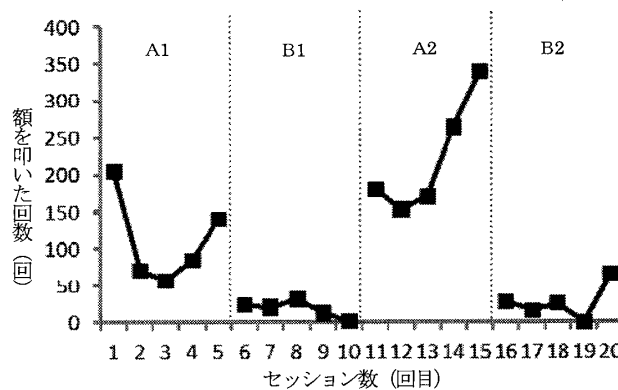


図1. 額を叩いた回数

III. 結果

額を叩いた回数を図1に示した。BL期(A1)は57～205回(平均111.6回)、介入期(B1)は2～32回(平均18.2回)、除去期は(A2)153～339回(平均221.4回)、再介入期(B2)は0～65回(平均26.8回)であった。MMSの再評価では、遅延再生が2単語、口頭命令に従うが2段階となり、4点向上して8/30となった。

IV. 考察

対象者は、初回のMMSの結果より記憶面の低下が認められており、介入前は口頭指示や、長文による指示では動作を上手く遂行出来ず、結果としてBPSDが出現していた。しかし、視覚的プロンプトの使用や簡潔な指示により、落ち着いた状態でのリハビリ参加が増加した。山本(2012)は、視覚刺激は消えずに存在し、記憶への負担が少なく見通しを持たせる刺激として有効であると報告している。本研究では入室から退室まで一貫して刺激を聴覚から視覚へ、内容も単語～3文節の短い指示に変更(視覚的プロンプト)した結果、介入期・再介入期のリハビリ拒否が消失した。

また、対象者は、無誤学習を目的とした教示、課題の設定、達成時の即時強化刺激の提示により、スムーズな解答が可能になった。また、課題間の「何もやっていない」時間中の額叩き行動については、大好きな子供の人形で遊ぶことが、額叩きの代替行動となった。注意が持続することにより、訓練内の行動が安定した。課題の遂行回数や正答率の向上を認め、表情変化などの向上に繋がった。

本研究の結果から、ST訓練内での認知症患者の問題行動に対して、無誤学習を主体としたABAの介入パッケージを取り入れる有効性が示唆された。

V. 引用文献

山本 淳一(2012)リハビリテーションのための応用行動分析学。リハビリテーションと応用行動分析学, 3, 1-4.